

豊栄市正尺の立地

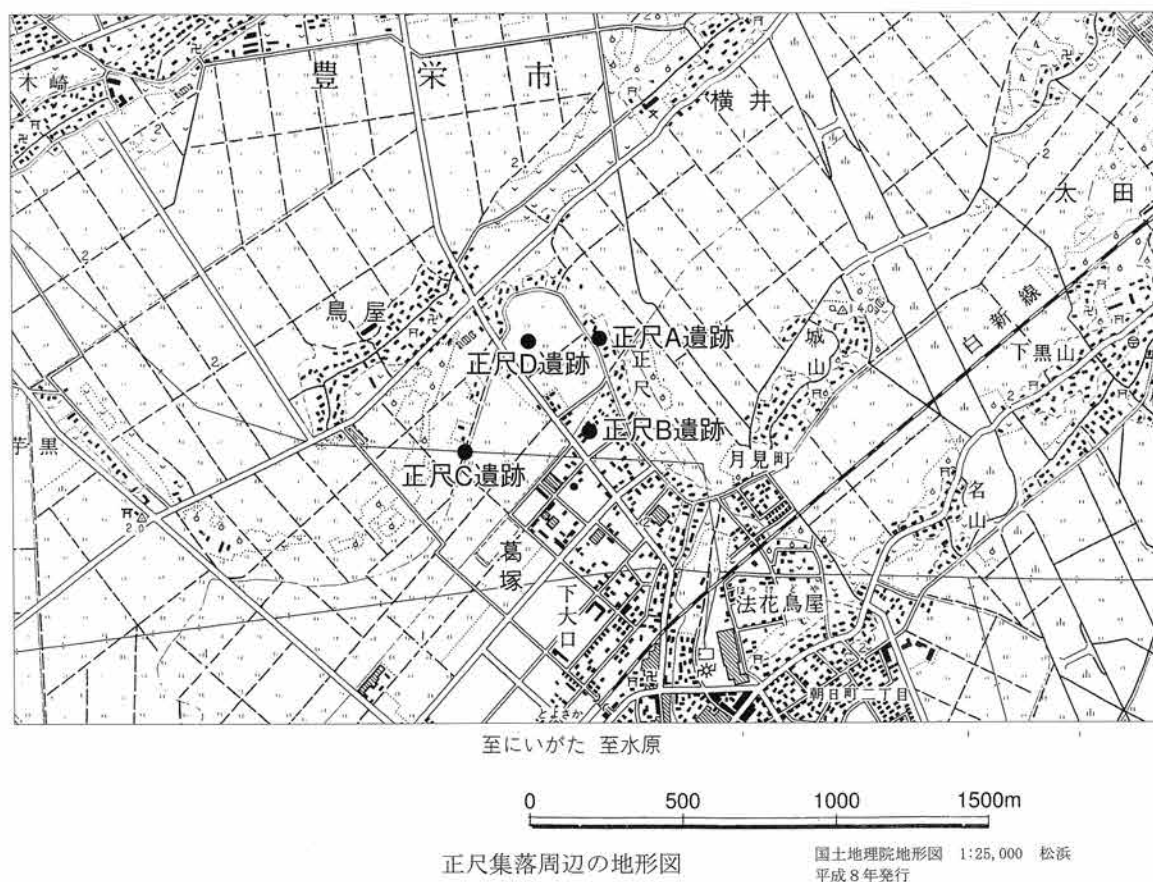
—正尺集落と正尺遺跡から—

松井 智

序文

本稿は、正尺遺跡（正尺遺跡についてはA～Dまで遺跡名が付けられているが、立地場所を考察する上で全て近接遺跡であるため便宜上一括して「正尺遺跡」とした）の立地場所を考察するに当たり、恐らく何がしかの影響を与えたであろう加治川水系や、正尺の立地環境、地質などを文献史料や調査資料を交え検討した。

第1章（A）では、加治川水系の往古の水路復元は砂丘列や自然災害などによって現地形からは複雑なため、紫雲寺潟（塩津潟という名称もあったが、ここでは現在の名称を使用する）の形成、近世の干拓開始から完了に至るまでの経緯等を考察するにとどめた。（B）では正尺遺跡に近く、何らかの形で関連性のある島見前潟や福島潟について、（A）と同様に検討した。第2章（A）では、民俗的に正尺集落の立地場所を検討した。（B）では、近世の洪水史料に見ることの出来る「正尺」から、その立地について考察した。第3章（A）では正尺近辺地域（主に豊栄）の概略的地質について触れることとし、（B）では（財）新潟県埋蔵文化財事業団の発掘調査による資料から考察を加えた。



1. 紫雲寺潟と福島潟

(A) 紫雲寺潟

紫雲寺潟は現在の紫雲寺町・中条町・加治川村の3町村に及ぶ潟湖であり、江戸時代中期まで存在した。はるか昔この地域は海であったが、胎内川・今泉川・加治川などが山から運んできた土砂と、日本海側特有の冬季間の季節風によって運ばれた海砂が堆積し、潟を形成した。正保国絵図には現在の名称である「紫雲寺潟」ではなく「塩津潟」と記載されており、広さは「長一里半余・横一里余」となっている。また「新潟湊よりの着船」とも書かれており、加治川・阿賀野川・信濃川を経て新潟湊への船運が開かれていたことがわかる。この紫雲寺潟であるが、いつからこの名称となったのかは不明である。元禄13(1700)年の岩船蒲原郡絵図(新発田市立図書館蔵)には「塩津潟」と記載されるが、宝永期(1704~11)以降になって紫雲寺潟が文献に見えるようになる。

さて紫雲寺潟の形成について、史料的に発見し得るものは殆ど存在しない。近世宝暦年間の『紫雲寺潟新田発起覚書』には「夫、紫雲寺潟と申ハ何頃より之名乗、又言伝そや、伝記、書翰にて分明ならず、世俗言伝ふる所、往昔北国に津波来て、民家ハいふにたらず、郷村を平均す引波に、海辺砂山を寄出ス由、当国海辺皆同様たり、谷々水落口失ひ、仍而低所水湛て渺々たり、一円之潟と成候哉」とある[小野ほか1985]。また「温古談話會」の越後地誌風俗全書『温古の栞』の名所舊跡乃部に収録されている「鹽津の湖」と題された約500字足らずのもの内の一部である。

鹽津の湖は上古北越有名の大湖なり後に紫雲寺潟と名く北蒲原郡に属す傳に垂仁天皇五十五年丙戌洪水沿岸に溢れ村落を破壊す其後大同年中再び洪水ありて沿岸の被害莫大なりしが時の国司七流の川筋を掘鑿し悪水を岩船郡に決して海に注入せしむ之を七湊と云ふ逐次水涸れ植出場となる享保年中信濃國人竹前某なるもの同地に來り開墾を企て拮据經營湖水を堀切川に落し藤塚濱と村松濱の間へ決出せしめ元文元辰年開墾の功成り新発田の城主溝口家將軍家の命を承け検地竿入草高一萬八千五百石と見積り(後略)

これは明治に発行された本であり、民間伝承をどのような形でこの誰から採集したのか全く不明の書物である。辛うじて『郷土史概論』に、9世紀後半、清和天皇の貞観5(862)年に越後地方に大地震が起こり、土地は隆起し、汀線が変動し、真野・道賀・草荷近辺は湖底であったところも隆起し内海が二分したと記している。これは恐らく『日本三代実録』巻第七に「五年六月十七日、戊申越中越後大震山崩谷陥壊民廬舎、圧死者衆。」から引いていると思われ、これを引用したであろう『越佐歴史』には「貞観五年六月十七日地震甚だしく、山は崩れて谷となり、地は陥りて池を為し、民屋を壊ること算なく、圧死するもの幾千なるを知らず、直江津近海に存せし小島幾個、之がため壊滅せりという」とある。寛治6(1092)年夏の越後大津波によって、親不知・海府浦の海岸は崩壊して現状となり、寺泊以北の砂山・古潟・飛山は平均されて海中に没し、古津・金津・大面・長岡・与板・大河津付近の内海は、土砂が沈殿堆積して浅くなり、東潟と呼ばれていた福島潟も、それによって流出口を失い湖状に変化したといわれる[水戸部ほか1978]。この津波による引波のためであろうか、紫雲寺潟周辺から掘り出される樹木や阿房堀開削工事中に発見された樹木はほとんどが東西の方向に倒れ根はほぼ東を向いているようである。『日本災異志』の日本震災凶謹攷には「八月三日諸国大風伊勢内外神宮殿廊倒洪水海溢損田壊廬民多死」とあり、被害は諸国にまで及んでいたことが推測される。

平成11・12年度に(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団によって日本海沿岸東北自動車道建設に伴う旧紫

雲寺潟下の青田遺跡の発掘調査が行われた。その遺跡は縄文時代晩期末であり、上の土層には平安時代の遺物が確認できる。発掘調査によって紫雲寺潟が形成されたのは9世紀以後であることが明らかになっている。直接的な史料では紫雲寺潟の形成は見出せないが、発掘成果と関係史料(『日本三代実録』)によって9世紀後半と推定することが出来る。

ではそれ以降の紫雲寺潟の変遷について史料を交えて概略的に触れていきたい。紫雲寺潟の歴史とは治水・水との戦いと干拓が主だったものとなる。湖岸には農耕や漁猟に従事する四五村程度の村が存在したが、加治川等が氾濫するたびに潟の湖面が上昇、耕地が水没する水害地域であった。この潟は当時周辺地域の水難防止を目的とした遊水池にされていた。潟端の地の開発が進むにつれ、水害を受ける度合いを増した。元禄11(1698)年、こうした水難を防止するために胎内川への放水路を掘削したが高低差の少ない地域であったため、成功しなかった。この潟の開発に着手したのは信州高井郡米子村(長野県須坂市)の竹前小八郎と兄権兵衛である。竹前家は米子村代々の庄屋をつとめ硫黄鉱山を経営する家柄であり、弟小八郎は江戸で煙草問屋を営み、その得意先の松平家への出入の間に紫雲寺潟周辺が開発可能な地であることを知ったものであろう。享保11(1726)年、自費による開発を幕府に請願した。

一、越後国蒲原郡紫雲寺潟水吐堀切之義、六年以前鈴木小右衛門様御代官所之節、潟廻四十五ヶ村一同御願申上、御公儀様御入用を以堀切被為仰付候処、水吐不申、年々御本田へ水入、其御上御損毛有之、下御百姓難儀仕候此度私入用を以、先年堀切之場所再堀仕、御公儀御物入之儀者不及申上、御百姓中難儀不被成候様ニ再堀普請仕、潟廻御本田へ水入無御座様仕、干方之場所大積五千石程御新田開発仕、御竿請御定法之通り御上納可仕候、私に被為仰付被下置候様奉願上候(後略)〔関ほか1986〕

ここでは、「6年前に潟回り45か村一同がお願い申しあげ、公費で落堀を掘削したが、排水が上手くいかず御上も百姓も難儀している。この度は自費で先年の場所を再掘し、御上も百姓も難儀しないよう工事をする。潟回りの本田には水が入らないようにし、干上がった場所約5,000石を新田として開発し、検地を請けて御定法の通りに年貢上納するのでどうか私に開発工事を仰付けください」としている。享保12(1727)年10月に開発許可がおりた。

竹前兄弟は米子村の田畑山林を質入れし開発資金を調達、さらに江戸の町人会津屋佐左衛門の参加を得て、享保13年越後に赴き、竹前兄弟は柏崎の町人で新田開発を手がけていた宮川四郎兵衛の協力も得て、同年7月工事を着工した。当初小八郎のみが現地で開発を指揮したが享保14年他界したため、兄権兵衛が後をついだ。権兵衛は妻子を信州から越後の地によび、紫雲寺潟開発に専念した。916両余の資金を投入しても工事は完工せず、資金不足で工事推進は困難となった。こうした折幕府は勘定所吟味役で治水家の井沢弥惣兵衛を永を現地に派遣、竹前家中心の工事推進をあやぶんだ幕府は潟水面と開発地を没収し、幕府が中心となって工事を続行した。その際、竹前家に500町歩を無地代で払い下げ、残り1,500町歩の開発者を再募集、新発田町の町人を主とした17人を選び干拓工事にあたせた。

井沢弥惣兵衛の指導する工法は当時紀州流(近世前期の干拓法は関東流と呼ばれ、出水の際の遊水池を計画的に設置して水害の拡大を極力防止するものであった)とよび、従来の遊水池を残す開発から転換し、河川の堤を高くして、積極的に溢れる水を防止し、耕地拡大をはかろうとするものであった。潟への加治川から流入する水を境川に堤防を築いて締め切り、潟から落堀を掘って日本海に放水し潟の干拓をはかった。新発田藩では潟への加治川からの流入がせきとめられることで遊水池がなくなり周辺村の水害が増大することを恐れ、その工法に反対した。

開発者（新発田組大庄屋等）は加治川の増水分を阿賀野川を経て日本海に放流する開削工事の実施を約束、新発田藩の積極的な協力を得、新潟町民の反対をおさえて松ヶ崎（新潟市）に排水路を開削。享保15（1730）年10月完工させた。この松ヶ崎堀割は享保16年春の融雪時の洪水で両岸が決壊し、一挙に幅が50間に広がり、阿賀野川が日本海に直流した。当時の技術では、復旧させることは不可能だったのである〔田中・中村1998〕。

阿賀野川が松ヶ崎の地で日本海へ直流することで北蒲原地域の水位は急速に低下し、紫雲寺潟干拓工事も一気に進展した。享保18年干拓工事は終了した。元文元（1736）年6月検地高入れが行われ、紫雲寺郷四二村新田総高16,858石余、1,930町歩の新開地が誕生したのである。

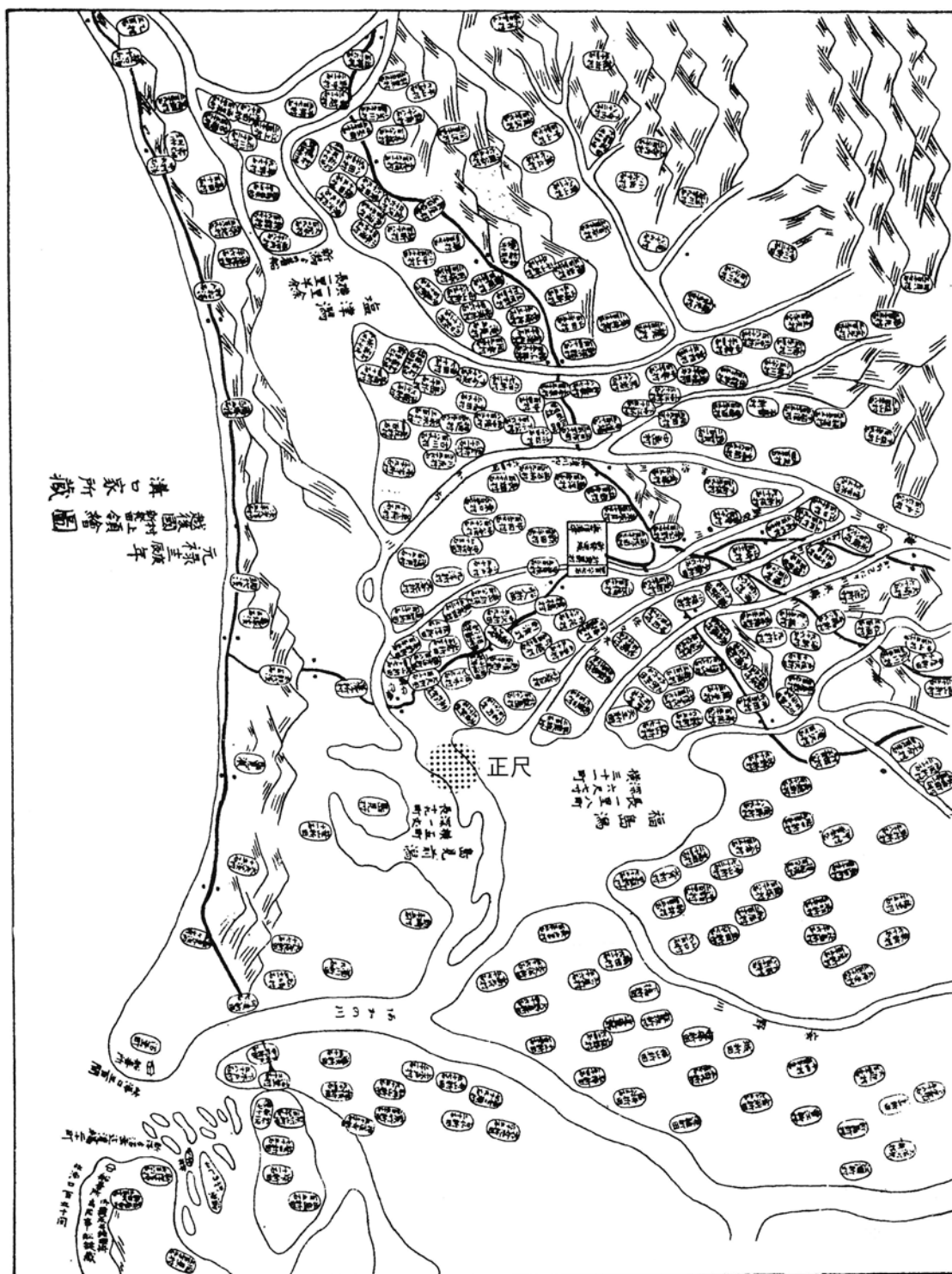
（B）福島潟と島見前潟

福島潟は現在の豊栄市域の大部分を占めていた潟湖である。かつては北の島見前潟とつながり、越の海とよばれる大きさをもっていた。しかし紫雲寺潟と同様その形成は不明であり、またあれだけの面積がありながら沿革・記述が残っていないという、非常に残念な潟である。しかし第1章（A）で触れたが、紫雲寺潟の形成が地震や津波などの自然災害によるものであるとすれば、紫雲寺潟と同じく加治川水系の流入する福島潟も同様に形成されたとみても問題はないと考察される。さて正保国絵図に「福島潟横三一町・長一里八丁半深六尺七尺、島見前潟横五町・長一九町・深一丈」とあり、内陸部から安野川・本田川・米倉川・佐々木川などの河川が流入、両潟の水は一本の太い川で阿賀野川へ排水されている。宝暦期（1751～64）に福島潟を一部干拓した頸城郡鉢崎村（現柏崎市）の山本文右衛門の「干拓経過上申書」には、貞享年中（1684～88）は「潟内水面五千八百町歩」も存在していた。福島潟の水は唯一の排水路である新井郷川を通じて阿賀野川に流出していたが、高低差があまりなく、阿賀野川が氾濫すれば逆流によって潟面が上昇する常襲的な水害地帯であった。そんな状況にあつて、潟畔農家は船を所持して水上交通に利用するとともに、魚や鳥、あるいは菱・蓮根などを採取、また潟岸の草生地は入会秣場として福島潟を利用していたのである。

福島潟干拓の最初は、第1章（A）で触れたように紫雲寺潟の干拓に伴って行われた享保15（1730）年の阿賀野川松ヶ崎放水路の開削によってであった。これ以前にも新発田町近辺、真木山麓、阿賀野川右岸などに点在していた村から潟に向かって徐々に切添え的な開発が進められてはいたが、微々たるものであった。松ヶ崎放水路の開削、さらに翌年の洪水によって両岸がえぐられたため放水路が当初の予定より大幅に拡張されたことで、阿賀野川の水が大量に日本海に排水されるようになり、福島潟の水も大幅に減少し、干拓も一気に進んだ。「干拓経過上申書」には、これによって「草生水面共二只今式千町歩程」にまでなつたと記されている。福島潟の面積は貞享年中の約3分の1に縮小したことになる。紫雲寺潟の潟面よりも4mも低かった福島潟では、開発事業は困難を極め特に排水工事に難渋した。主要工事としては、最も低い福島潟へ流入する太田川（旧佐々木川）の流末を宝暦10～11（1760～61）年に新発田川へ瀬替えし、新発田川の下流を宝暦10年と文化4（1807）年の2回にわたって内陸砂丘を掘り割って、砂丘の外側へ瀬替えし、新井郷川の下流へ流した。一方、唯一の排水河川である濁川を掘削し、阿賀野川へ注ぐ河口を数回にわたって阿賀野川の下流へ付け替え、排水の便を図った。さらに南東部から福島潟へ流入する駒林川を、濁川を延長掘削した新井郷川上流へ瀬替えさせ、ようやく文化8（1811）年の島見前潟の浚渫排水工事を最後に、開発・干拓事業を終わった〔金子1981〕。これによって島見前潟は完全に干拓されたのである。享保までの新田開発は新発田藩を中心として進められた。下興野新田全村99町歩が筆頭家老溝口内匠に与え

られたように、藩士の役割が大きかった。それとともに領内の有力富豪の資金力も導入され、のちに千町歩地主となる白勢長兵衛家は、土地亀新田において約 50 町歩を開発して新田地主となっている。しかし福島潟周辺には依然として広大な未開発地が残されていた。

宝暦年間に新田開発を始めたのは、鉢崎村の山本丈右衛門である。丈右衛門は寛保 2 年 (1742) 以来、福島潟を「御上様之御新田可相成御場所」とであると主張して、幕府に開発を願出していた。「開発願書」には



元禄 13 年 越後国村上新発田領絵図

(聖籠町誌編さん委員会編 1978 『聖籠町誌』(増補版) 聖籠町公民館より転載、一部加筆)

一、越後国蒲原郡福島潟之儀、貞享年中御検知之節、潟内水面五千八百町歩有之、国中之大潟ニテ、御料所之御地面ニ相違無御座候、私儀越後国出生仕、年来及承罷在候、然処享保十五戊年同国紫雲寺潟御新田開発被仰付候砌、蒲原郡為悪水落し阿賀野川ト申大川、松ヶ崎ト申突当之砂山新規ニ堀割被仰付、直ニ海え堀落候ニ付、蒲原郡之内御料・御私領共ニ悪水落宜敷相成、福島潟水面自然ト引落、干形多相附、近辺之村々ヨリ段々新田開発仕、大方御私領之新田罷成、相残候潟之分、草生水面共ニ只今式千町歩程ニ罷成候、抑御上様之御新田可相成御場所御捨被置候附、莫大之御新田所御私領之地面ニ罷成、残念ニ奉存候
(後略) [小林ほか1980]

しかし、後略の部分に関連記述があるが、紫雲寺潟の領有権をめぐる幕府に押しきられた新発田藩が、福島潟の領有権を主張したため吟味は長期化した。そして一度は新発田藩の主張が認められ、開発願は退けられたが、丈右衛門の再度の開発願によって、幕府は宝暦4(1754)年新発田藩より福島潟地先の33カ村を上知させ、翌年丈右衛門に開発を許可したのである。幕府は新たに新田となるであろう土地を507町歩と見積り、このうち204町歩は潟周辺村落の入会秣場であることから周辺村落へ開発を命じ、残り303町歩の水面および草生地を開発を丈右衛門に命じた。この時期の開発は、村請開発と町人請負開発の2本立てで進められた。丈右衛門による開発は、宝暦6年に着手されたが、資金的な問題と(幕府から3,000両拝借)、工事の難しさからあまり進捗せず、89町歩余を開発したところで明和9(1772)年に丈右衛門が没して終る。その時4,700両余の負債があったという。

丈右衛門没後、請負を希望する者が続出したが、安永3(1774)年に岩船郡紀伊国新田(現荒川町)の久左衛門に開発権が与えられた。しかし久左衛門の開発もあまり進捗せず安永8年病没し、開発権はその後天明4(1784)年に幕府領水原町(現北蒲原郡水原町)の万五郎へ移る。この間新発田藩では旧領返還運動を展開し、幕府は干拓が進展しないこともあり、安永6年に潟面を残して旧新発田藩領の村一部を返し、さらに天明6年には福島潟面をも新発田藩に返還する。新発田藩ではそれを新発田組大庄屋郡蔵・川北組大庄屋嘉次右衛門に請負わせる。その3年後の寛政元(1789)年、幕府は再び福島潟面・新田を上知し、翌2年に水原代官領の大地主市島徳次郎など13人に開発を命じた。これを「十三人請」という。寛政から文化期(1804～18)にかけて市島新田など13の新田が開発される。その合計反別は文化元年に313町歩余であった。なおここで注目されるのは、これらの新田には人家がなかったことである。これらの新田は市島ら豪農層によって開発され、その所有に属し、近郷農民の出作りによって耕作されたため「人家なき村」になったのである[武田ほか1970]。

この間にも新発田藩による旧領返還運動は続けられ、文政6(1823)年福島潟近郷8,600石を幕府が新発田藩に預ける形で決着する。以後再び新発田藩の主導で開発が進められたのである。これに対して「十三人衆」は新発田藩の方法を批判して、水原代官所による直轄化を願ったが叶わず、天保6(1835)年には福島潟水面・新田共1,122町歩が13,875両余で、「十三人衆」から新発田町白勢瀬兵衛名義で新発田藩に譲渡される。譲渡地はさらに福島潟周辺村落に譲渡される予定だったが、資金的な問題からすぐには行われず、嘉永期(1848～54)に村々に譲渡され、以後の開発は村々に託されたのである。つまり幕府あるいは新発田藩の力をもってしても福島潟を全面的に干拓することができなかったことを示しているのである。

その後、大正2(1913)年に加治川分水路が、同14年には新井郷川を阿賀野川から分離して直接日本海へ流す工事が完成した。また、昭和36(1961)年には新井郷川に動力排水機場が設置された結果、福島潟はわずか面積1.7平方kmの遊水池となり、現在豊栄周辺で見ることのできる乾田の景観が展開した。

2. 「正尺」の立地

(A) 民俗的にみる「正尺」

J R 豊栄駅を降り、左手に向かいサティ方面に行くと二つ目の信号のある葛塚の十字路にたどり着く。その十字路の脇に堂が設けられ、日蓮宗関係の石碑二つと観世音菩薩1体が祀られていることに気付く。その十字路を踏切（北西）方面に曲がり若干高堤となっている線路を越えた所にも踏切地蔵が祀られている。その道を道なりに行き「城山」の矢印標識のあるところに入っていくと下大口町に入る。下大口町と月見町の分岐点に地蔵堂が設けられ3体の地蔵が祀られている。この分岐点から北北西方面に向かうと正尺の集落となる。道の右手には古い建物や家、木の生えた空き地等が続き、奥には一段低い水路と田が広がっている。左手には新興住宅地並の家々が連なり、埋め立てであろうかこの辺りでは見られないような新しい土で右手の地盤より高く盛られている感じがする。昭和40年代に埋め立てられたのは恐らくこの近辺と想像がつく。暫く行くと家並の途切れる場所がある。しかし正尺はここで途切れず横井集落の手前の北北東から西南西に鳥屋集落近辺まで集落として存在している所まで続いている。狭い道を北方向に進むと集落に入るが、入った所に正尺集落の地蔵堂があり、2体の地蔵が祀られていた。今回着目したのはこの地蔵である。

正尺の領域、入り口について触れるが、その前に一般的な領域・入り口について民俗的に述べておきたい。近畿地方の集落でしばしば見られるのが勧請縄である。道路が集落に入る地点に、祈祷の文章を書いた勧請板を中央に吊り下げた注連縄を、道の両側に木や竹を建てて張るものである。集落に入るためにはこの勧請縄の下を通らなければならないのであるが、集落に災いをもたらす危険なものは祈祷文の呪力によって侵入を阻止され、集落の内側は平和で安全な空間になる。ところによっては、勧進板はなく、注連縄のみの場合もあるし、またその縄を太くして、大蛇の形にするところもあり、その縄をジャ（蛇）とかジャヅナ（蛇綱）とよぶ。古くはこのような恐しい姿をしたものを設定し、その呪力で災いの侵入を阻止しようとしたのであるが、後に仏教寺院の影響下に入って祈祷文を記した勧進板を吊るす縄に変わったものと思われる。このような集落の入口に呪物を設定して集落を守ろうとする行事を道切り行事というが、勧進縄はその典型であり、全国各地でさまざまな形式で行われている。巨大な霊の存在を外に示し、侵入者に対し恐怖の念をいだかせようとするものである。また集落の内と外を区分するもう一つの標識は道祖神とか地蔵である。道路が集落部分に入ろうとする地点に道祖神と書いた石や神像を彫った石が立っているのを中部地方や関東地方ではよく見かける。そして近畿地方などでは同様の地点にしばしば地蔵が立っている。現在は地蔵が祀られている近畿地方の集落でも、古い村絵図や検地帳には道祖神の存在を示す記載があり、古くは道祖神であったものが地蔵に変わったことが知られる。この道祖神は「サイノカミ」とか「サエノカミ」とよばれるのが一般的であるが、この「サイ」は「境」の「サイ」であり、「さえぎる」の「サエ」であろう。道祖神は集落の入口で、内外の区別を明確にし、邪悪な霊の外からの侵入を阻止する神なのである。道切り行事に勧請される神仏と道祖神は同じ性格のものといえる〔福田・宮田1983〕。

以上を踏まえれば、地蔵は集落の道切り、つまり境を指していることがわかる。近現代における交通形態の変化、モータリゼーションによって各地に道路が新造、延長、拡幅され交通の障害となるような道標・常夜灯・地蔵は時として撤去・移築の憂き目にあう。しかし在ではそれほどの影響を受けず、逆に在の歴史・伝統・団結によって今なおほとんど位置が移動せずに祀られていることが多い。北東側の正尺集落内を南東から北西に通る道路について見ると、大正年間の地図にも確認が出来る。拡幅があったとしても

さほどの影響を受けなかったものと推定出来る。地蔵の祀られているのは道路の北東側、近世以降に家屋の建てられた側に存在する。南西側は昭和40年代に埋め立てられて宅地化した土地であることを考えれば例え拡張したとしても南西側と考えるのが妥当であろう。つまり地蔵にはそれほどの影響はなかったものと考えられる。これらから正尺の道切り・境が見えてくる。南は下大口との境、北は横井との境であろう。正尺は鳥屋遺跡の南側まで延びているが、地蔵は存在しない。恐らく地蔵を像立した頃にはまだ人家が存在しなかったのであろうし、また隣接集落に抜けるための主要道が存在しなかったこともその理由であろう。

そもそも日本における地蔵等の伝来は古く奈良時代まで遡るが、平安時代の末法思想頃からの地獄思想の発展によって地蔵信仰は民間で広まってくる。近世になると延命地蔵・片目地蔵・首無し地蔵・笠地蔵など、無数の現世利益的身代わり地蔵が創出されるようになり、地蔵信仰は広範になり一般に浸透した。

正尺・下大口の地蔵の祭祀年号は地蔵台座や蓮弁・背中に刻まれておらず、はっきりしない。葛塚の交差点の石碑並びに観世音菩薩については、中央の「日蓮五百五十遠忌」のが「天保二（1831）年七月二八日」、左の観世音菩薩像は年数字が欠損しているが「文化十口丙子年十七日講中（文化年間で丙子の年は十三年の1816年）」、右のについては年号二つ目の文字が欠損しており不明であるが、「延口四（延宝なら1676、延享なら1747）年五月日」と刻まれており、松ヶ崎放水路の開削が享保15（1730）年、正尺浦が検地されたのが宝暦6（1756）年を考慮すれば、右の日蓮宗関係石碑は延享4（1747）年である可能性が高いとともに、町場形成が早期に成されたことが伺える。以上を踏まえれば、正尺・下大口の地蔵もその頃以降に祭祀された可能性は否定出来ない。現在の地蔵の形式からさほど古いものではないことは推測出来るが、地蔵祭祀と民俗的事例としての道切りの行事から考察すれば以前祭祀の地蔵の場所に再び地蔵を祭祀した可能性がある。

正尺A・B遺跡はちょうど道切りによって境界づけられた正尺集落の中に存在する。DはAに近接しているので範囲内と見られるであろう。Cは少々西に離れているため地蔵による集落の道切りの中には入らないが、全遺跡は第3章にも関係するが、河川による自然堤防上に位置していることには間違いはない。そういった意味で近世の集落形成と古墳時代前期の遺跡が重複することは、当時の地形の差異がそれほど乖離していなかったことにつながるのであるし、また阿賀野川以北の地域を考える上で砂丘堤防上・自然堤防上・微高地などは重要であることを示唆している一例でもあろう。今現在でもなおそういった地域に住宅が多く、集落を形成しているのが多々見られる。しかし近世になって福島潟の範囲減少・島見前潟の開拓後にこの地が開けたことを考えれば、遺跡が存在していた時代と約1,400年もの間があいていることになる。この1,400年間に気候の変化・天変地異・自然災害などが幾度と無く繰り返されてきたことは想像に難くない。紫雲寺潟や福島潟・島見前潟の形成は第1章で触れたようにそれらによってなされたものであろう。集落の維持を断念せざるを得ない一事情がそこには存在したはずである。新潟県の場合、特に信濃川・阿賀野川の二大河川による沖積平野であることを勘案すれば今現在人が住していない場所（低地）にも遺跡は存在する可能性がある。

（B）史料的に見る「正尺」

史料として正尺の地名を初見することが正尺集落の始まりと考察してもそれほど問題点はないが、遺跡として正尺を考える上では史料初見には大いなる誤謬を生じることには至極当然である。しかし史料に表れることによってその地域がどのような場所であったのかを推察・判断することは可能であろう。

葛塚は新潟砂丘列には属さず、河川による自然堤防上に立地している。近世になって開発によって人が住むようになったようであるが、確かに豊栄市では中世以前に遡る史料は殆ど見ることが出来ない。律令制では越後国沼垂郡に属していたと推測されるが、「和名抄」に見ることの出来る郷名の比定については不明である。また文永2（1265）年の大見政家譲状（大見水原文書）の「水原条西黒河・舟原境事」の中に「西 限菅淵、河下飯野次柳」なる記載がある。これが指し示すのは山飯野村・里飯野村と推察される〔関ほか1986〕。

正尺の存在する豊栄であるが、中世以前に成立の確認できる村落は、六つ程しかない。内島見は北陸征夷時代、横江（現在の横井）は不詳、高森は伝持統天皇9年、飯野（現在の里飯野）は鎌倉時代初期、山飯野・長戸呂は室町時代末期である。史料的客観性においてはその創村年歴には疑問を差し挟む余地はあるが、その内高森村・里飯野村・山飯野村・長戸呂村は阿賀野川自然堤防上に存在しており、実質豊栄を含む近郷の創村は近世になってからである。慶長3（1598）年に溝口氏が新発田に入国、その後元禄年間（1688～1703）までに新発田藩支配では400ヶ村以上、豊栄市内では享保年間（1716～1735）までに17ヶ村が創村された。これは大半が大河湖沼の開発によるものに他ならない。「正尺」も多聞に漏れず、葛塚新田として享保19（1734）年に成立、元文2年（1737）新発田藩による改村名では下興野新田として字3ヶ村（葛塚・正尺・樋ノ内）をもって創村されたのである。しかしながら、ここの村民は自作農民（本百姓）ではなかった。「宝暦六年譲り渡シ申田畑居屋敷証文」には「下興野新田一円之場所溝口内匠様先規御抱地」とあり、成立当時新発田藩家老溝口内匠の所領であり〔武田ほか1970〕、全農民が又小作だった。宝暦4（1754）年に幕府領となり、宝暦六年下興野新田の庄屋遠藤七郎左衛門が水原代官の援助を得、新発田町商人中村藤蔵から800両を借用、溝口内匠に600両を支払い、村民の所持とした。その後遠藤は六斎市の開市に成功、この周辺は下興野新田を中心に発展し、水運の便利な新井郷川沿いに移っていくのである。そもそも正尺という地名は検地に由来する。そういった意味でも葛塚は近世成立が伺える。葛塚成立の「覚」の史料によれば、

（前略）

一、潟近所ニ葛塚ト申所元来人家無之内ニ候、何頃ヨリ家居出来候テ当時何軒程有之候哉ト御尋御座候

葛塚と申処元来人家中方ニテ芦・萱・真菰生之場所ニ哉御座候処、享保十五年ヨリ草生悪敷場所年々口細ニ開発仕候、当分ハ近所何方ヨリ通イ作ニ仕候へ共、七年以前ヨリ作人家等作り、只今ハ作人家数七拾軒程造り申、右之外当分作場小屋等所々ニ造置申候

（後略）〔伊藤ほか1990〕

とある。ここでは「葛塚は芦や萱や真菰の生える場所であり、人や家は内の方にあった。享保15（1730）年から草などが生えているところを僅かながら開発しており、近所から通って営んでいたが、享保7年以前から家小屋などを作り、元文3（1738）年頃には家数が70軒ほど存在し、他に作場小屋を所々に造っていた」とある。

実際正保国絵図には福島潟・島見前潟は記載されているが、現在の葛塚近辺には何も描かれておらず、村・集落としては存在していなかったことが伺える。恐らく、河川氾濫によってその都度水の浸る様な場所には積極的に住まうことはせず、比較的高い土地に生活し、何らかの用事を果たす場所としてしか利用価値はなかったと思われる。第1章にあるように新発田藩の施策もあり、福島潟の潟端近辺の開発により、人が住まうようになったのである。

さて、近世文書に現れる正尺について見ていきたい。近世末期の安政4（1857）年5月に大夫興野付近で新発田川と新太田川の水が合わさって堤防が決壊し洪水が発生、約一ヶ月間水防に腐心した。その当時の「下興野新田水害用留簿」〔伊藤ほか1990〕には、

乍恐以口上書奉申上候

上郷より押懸水之様子見受ニ遣候処、新ハた川筋之内太夫興野地内切所ニおよび、新ハた川、新太田川水勢と今笠柳切所吐出水と一同ニ相成、当村防所正尺裏へ突懸候間、右切所水戸留不仕候而は追々水嵩相増候処、わつかの吐場所ニ而ハ折角防留候当村水底ニ相成、数百軒之人家床上りいたし候外無之趣百姓共相歎 譬ひ防留候ても扨切も不致、数日水落不申候てハ、通し水之ため稲草水冠も同様、迷惑至極ニ奉存候、何卒早々水戸留扨切之義、御手厚御本領へ御懸合被成下度奉願上候、右は追々危難場出来候ニ付此段急奉申上候、已上

下興野新田

閏五月十六日

庄屋七郎左衛門

御代官中様

と記されている。下興野新田（葛塚・正尺・樋ノ内）の防所であった正尺の裏へ突然水が打ち寄せたとしている。下興野新田の防所が正尺であったことには周辺地域が低湿地であったことが理由として挙げられる。松ヶ崎放水路完成以後、島見前潟・福島潟の干拓が進んだことは前述の通りであるが、それでもなお水害は完全には防ぐことは出来なかった。そのため、耕地を水害から守るための土居（堤防）が造られたのである。前述の庄屋遠藤七郎左衛門が築いたといわれ、「中大川土居」と呼ばれており、宝暦6（1756）年の検地帳に記載されている。旧大口川・旧新井郷川や旧大川など、葛塚周辺を流れていた河川からの水害を防ぐため、正尺・葛塚を囲むようにして耕地周辺の囲堤を築造したのである〔現地解説板より〕。この安政4（1857）年の水害は北東方向から松影近辺を通り砂丘間低地を沿うような形で正尺の北東側に流れてきたのである。この時の水防作業などが史料として見られるが、正尺の立地を考察する上で「正尺」の名前が散見出来る史料を抜粋した〔伊藤ほか1990〕。

一、嶋見辺水見帰る、未一番割切れ不申候得共、とても防方出来不申候よし、七郎左衛門重立之者正尺うら通人足ニ而、木なとしけり往来相成兼候場所きらせ、道ヲひらき通路ヲよろしくいたす（後略）

ここで言う「正尺うら通り」とは正尺の裏通りか浦通りかははっきりしないが、後の史料に「正尺浜往来」という文言が記載されているので、恐らく裏通りを水防のため草木等を刈り払い通行しやすいようにしたことを表していると思われる。

一、正尺浜往来と正尺裏手ニ而防留候得共、中大川下大川の防ニ相成不申ニ付、鳥屋と申合防候積之处、八郎右衛門囲切れ其外所々切れ、とても防留相成不申候、内嶋見之もの番方なしに引取候趣とや次郎助申聞候間、往来防ハ見合、正尺一円裏手より防候積之事（後略）

浜往来と裏手でもって水防のつもりがあたわず、一円裏手で対処するということを述べている。ここで言う裏手とは当時集落の存在した正尺北東側（第2章（A）で町切りされた範囲）の裏手（北東側）である。近世末期に正尺に越してきたと言われる常木氏（日本海沿岸東北自動車道建設に伴い発掘された正尺A遺跡の近接）の家構えからしても裏手は北東側である。ただ一円とすると、正尺地内として家屋があまり存在していなかったであろう鳥屋近辺では、鳥屋との境の自然堤防・微高地に築造されたであろう中大川土居の外側、つまり大川を裏手としていたと思われる。

一、見る内ニ水相増、八ツ半時頃ハ正尺うら堤式尺位さへ出不申候事

この「正尺うら堤」が恐らく遠藤七郎左衛門の築堤した「中大川土居」であろう。当時どれ位の高さがあったのか現地形から復元できず、不明であるが堤が水面より約60cmしか出ていないということを示している。現正尺の北東側田圃の手前に水路が存在しており、その水路の田圃側に現状では人が歩くことが辛うじて可能な土盛りが存在しているが、それを伝って北北西方面に向かうと、第2章（A）で触れた正尺の地蔵の方向に向かう。しかし途中で田面よりは明らかに高い、木の生えた場所があり、非常に小さな祠が祀られている。日本の場合、祠を祀る場所は集落の外れが多い。そして大概は他よりは地面の高い所に見られる。正尺のこの祠の由来はよく分からないが、その存在場所を考慮すれば第2章（A）の補強資料とも成り得るし、可能性としては「中大川土居」跡も否定出来ない。

一、十六日八ツ時頃、追々水増候間、所々手宛申付候処、中大川正尺七百間之場所防所ニ相成人数行足不申当惑いたし候事

中大川正尺の700間（約1.3km）の場所は防所であるが、人数が足りなく困っていることを記している。

一、上大口正尺之ものなと床かき候趣ニ付、決て切所ニ不相成候間、床上りなど之支度いたし不申、防方ニ専らかかり候様申触候事

上大口や正尺の人達に、堤は決壊しないので水が上がってきた時の準備をする前に防方に専念せよと触れたことを記している。

一、正尺ハ家々ニ而其もの之屋敷堤ヲかため、難場ハ最寄より差添人足ヲ付候事、尤二男三男倅なと差出し候事、上中下大川へ三ヶ所小屋かけいたし、在方百姓人足并町方賃人足二而固メさせ候事

正尺の屋敷堤を固め、困難な場所には人足を送るが、次男か三男などを差し出すようにとしている。屋敷堤とは何を示すのか、現在の正尺の裏手から調べてはみたがそれらしきものは見出すことは出来なかった。屋敷毎に堤が設定されていたのであろうか。それにしても家督を継ぐであろう長男は大切にされたのである。

一、昨夜より今日終日雨故、又々加治川出水いたし可申趣ニ相聞、左候得ばもはや人足才番とも疲れ居、堤ハ水ニ而弱らかく相成候処 此上出水ニ相成候而ハ、危難場ニ而ハ防方相成兼候間、七郎左衛門昼後中大川、下大川、正尺うらとも見廻り候処、中大川橋場之辺堤手弱く、其上西風ニ而波あらく打付け崩候様ニ付、小屋小屋人足呼集杭木土俵等ハ備置候分ニ而、堤左右へ杭ヲ付、竹しはりをかけ、土俵ヲ重ニかけ、波あらく打付候処ハ刈よし土俵ヲ張わたし相防候事

雨のため加治川出水、人々は疲れ堤も水で軟弱になってしまったが、更に出水されては防ぎようがないので巡回し、軟弱な堤を補強している。当時の堤の補強工事手法が伺える。

上記の他にも「正尺」の記載のある史料は散見出来るが、関連性が薄いため割愛した。以上、洪水時の水防関連史料から正尺を見てきたが、この地域はいつも水害に脅かされてきた場所であり、干拓によって耕地の拡大が計られたが、逆に低湿地であったが故に水防に腐心しなければならなかったのである。人々は水害被害の少ない微高地等に家屋を構え、いつ来るか分からぬ自然の驚異に恐れながら囲堤を築き、堤内の低湿地開発、町場の水防としてきたのである。ちょうど正尺はそんな微高地・自然堤防の場所であり、その役割を果たしてきた場所でもあったのである。昭和41（1966）年の七・一七水害（いわゆる羽越水害）の時、中大口・下大口・本町通りなどの微高地は冠水を免れた、あるいは比較的被害の少ない冠水であったことを思い起こせば、正尺集落、正尺遺跡がどのような場所に立地していたかが想像されよう。おわり

に安政4（1857）年の水害史料から読みとれる、葛塚近辺の土壤に触れる。

一、六月十九日、松影水戸留之場所、新太田川出水ニ而危き趣相聞候間、用水組一同罷越し見分いたし候処、追々水も引落候様子ニ付番方も引上ケ候事、尤佐々木へ懸合水戸留之場所破損いたし候間、本普請いたし候様引会候処、追々御出役御出ニ付普請取懸之趣、要八申聞候事、其外堤通手薄く候間、是ハ用水組手ニ而盆後手すき次第上置腹付いたし可申と申合候事右之節城山松影辺田畠見受候処、稲草一向いたミ不申、六七分之作ニ相成候様子、且松影などハ木綿、きふり、なす、豆、かほちや其外野菜様之もの一向いたミ不申、水ニ逢候様子無之候事、是ハ加治川水ハ冷ややかにて、同所などハ砂地故しめり薄く、且水後天氣ニ而早く乾き候間、かれ不申事と相見ひ候事、真土の処ハ嘉山など木綿ハ不及申、野菜不残すたりニ相成候事真土ハかんきおそく湿気強く候間、枯れ損し候事と相見ひ候事、稲も真土之場所ハ赤く相成、皆無同様ニ相成候事

城山・松影周辺の田畑は稲草など痛まず、松影に至っては木綿、胡瓜、茄子、豆、南瓜や他の野菜も一切傷んでなく、水害にあったようには見えなかった。加治川の水が低温であったためと、周辺が砂質で水が抜けやすかったことが要因である。それに対して嘉山などの土の所は木綿・野菜は腐ってしまった。湿気が多かったことが原因であるとしている。これは、城山・松影が河川流出の砂や季節風などによる砂丘などの土壤であった場所であり、この史料からも葛塚周辺を読みとることが出来る。

さて蛇足ではあるが、近現代の史料から正尺の地名を珍しいところから拾うことが出来る。明治34（1901）年7月の「改正川筋運賃表」である。抜粋すれば「○葛塚川筋 濁川、新井崎、名目所 右金式銭五厘 兄弟堀、松崎 右金式銭六厘 新井郷、大瀬柳、土地亀、葛塚町、嘉山、正尺、大口、須戸、早通り 右金式銭九厘」とある〔武田ほか1970〕。これらの地名は舟付場であり、船が行き来していたことを表している。しかしこの頃の正尺・大口近辺には船が行き交うほどの大川は存在していない。旧新井郷川ですら瀬替えされている。葛塚の舟付場は今現在でも確認できるが、正尺C遺跡に発掘にこられていた作業員さん達に尋ねてみても正尺の舟付場はあり得ないのではないかと、いうことであつた。正尺・大口近辺の川とすれば大口川であるが、これも無くなっている。とすれば町浦川ではないかと思われるが、再び現地調査しなければならない。

3. 地形と発掘調査

（A） 地形の概要と地形区分

信濃川、阿賀野川両大河により生成された新潟平野は日本海に沿って、南北におよそ100km、東西に10～25kmの広さをもつ、面積2,070平方kmを占める関東平野につぐ本州第二の大平野である。新潟平野は、日本海平野群と同様約1万年前はその全域が沖積世の海によっておおわれていたもので、わずかに弥彦・角田山が見えていた程度である。沿岸流によって運搬された土砂は波浪により堆積が始まり角田山北端に砂嘴が形成されるようになる。砂嘴は成長して砂州となり平野前線を閉塞したため広大な湖沼群が出現した。このように新潟平野は平野の出口を砂州の形成でさえぎられて発達してきた、いわゆる潟湖充填平野で、信濃川等の流入河川で運搬、堆積された土砂が被覆しており、現在に至ってもまだ盆地状の低湿地を残している。つまりこの地域は砂丘地を除けば大半が標高5m以下の低湿地で泥炭地が多く、いたるところに堆積の変遷を示す旧河道の氾濫原、蛇行跡、島畑、自然堤防等が見られる。

新潟平野は日本の代表的な穀倉地帯である。このように全域にわたって水田が開発されたのは藩政時代以来の低湿地克服のための排水と新田開発による。

信濃川の河川勾配は長岡から下流にかけて僅か4,000分の1の標高差であり、傾斜が極めて緩やかである。また、標高5m線は、信濃川河口から直線距離で28kmも内陸にあり、庄内平野の最上川が河口から9km、富山平野が海岸線から7.5km等に比べれば、その低平性は著しい。さらに新潟をはじめ、長潟、丸潟、鍋潟、道潟、升潟、大潟等、「潟」の名を有する地名が平野内に散在しており、そのほとんどが標高3m以下に位置する。標高0mの最低所も残っており、河川堆積を受ける以前の平野原形と考えられている。このような低湿性は泥炭地の分布によっても知られる。池沼の部分とその周囲、砂丘間低地、自然堤防後背湿地にあらわれ、広い沼沢地の分布を示している。以上、列挙したように新潟平野の低湿性は他の平野にみられない特徴といえるもので、そこに生活基盤を築くための低湿地の克服と洪水との戦いが越後の農民の宿命であった。慶長5（1600）年から昭和24（1949）年の約350年間に記録に残る大洪水は94回、ほぼ4年に1回は大洪水に見舞われていたことになり、小さな洪水は数多く起きたであろう。一度洪水ともなれば、平野一面海と化し、しかもその湛水はなかなか引かなかったという〔永田ほか1973〕。

さて豊栄市は、平坦な沖積平野から成り立っている。傾斜区分図によれば、3～8度の緩傾斜面は、北部の向山～高山～屋敷沢、尾山～引越、横井～笠柳～藤寄、城山～松影の北東から南西にかけて発達する4本の新砂丘列部にみられるにすぎない。その他は3度未満の最緩傾斜面で、加治川・阿賀野川扇状地に挟まれる形で南から北へ傾斜している。おおむね平坦な沖積面から成り立っている豊栄市も地形分類上では、三つに区分することが可能である。それは、①砂堆・砂丘帯とその間の砂丘間低地、②阿賀野川・駒林川などの流路変更により形成された自然堤防とそれに伴う後背湿地帯、③最も低湿で盆状をなす潟湖を含む低地の三つである。

①砂丘・砂堆列は豊栄市において、内陸まで最もよくその発達がみられる。最も内陸側にある新砂丘Ⅰは、豊栄市では三列認められ、黒山～名山～中大口～上大口にかけての微高地は、この三列の内、最も内陸側のものである。新砂丘Ⅱは新砂丘Ⅰの海側にあり、四列から成り立っているが、豊栄市では、居山～内島見、引越～尾山などにみられる。さらに新砂丘Ⅲは、市域にはみられないが、海岸部に二列認められ、最も新しい起伏のある砂丘である。この三つの新砂丘列は、沖積世に内陸側から沿岸にかけて順次形成されていったものであるが、正確な形成年代についてはまだ不明な点が多い。砂丘地における遺跡の分布は、豊栄市における人間生活の黎明期との関連で、非常に興味深い問題である。

②概ね低湿な豊栄市の平地にあって、自然堤防の高まりは重要な集落立地場であった。内陸側から砂丘が形成されると同様に、幾多の自然堤防が形成された。不明瞭な阿賀野川の扇状地は、谷口の馬下付近で海拔25m、水原で7.5mという緩傾斜面を形成している。豊栄市平林・十二・灰塚から胡桃山にかけての集落は、阿賀野川の自然堤防上に位置している。また、岡新田・竹ノ通・杓子潟の集落は駒林川、兄弟堀から嘉山・新鼻にかけては、新井郷川の自然堤防上の集落である。また旧新発田川に沿った木伏から内島見にかけての集落は、砂丘の影響を受けながらも自然堤防の景観が今日最もよく残っている地域である。特に阿賀野川・駒林川は流路変更が著しく、前者では焼山・関屋・七島をとりまく旧河道や、十二潟（河跡湖）がみられる。自然堤防と後背湿地との高低差は最大2～3メートルで、阿賀野川から東へ進むにつれて数10cm単位と小さくなる。また駒林川の自然堤防は、ある程度連続性がみられるが、後背湿地には現在でも島畑が数多く分布し、近世以来、梨・桃・麦の生産が盛んであった。

③豊栄市で最も海拔高度の低い地区は、早通・芋黒・高森新田に囲まれた後背湿地と、福島潟を中心とした盆状の低地である。海拔高度が2m未満の低湿地では、ヨシ・マコモなどの植生がみられ、泥炭層や湛水地帯特有のグライ層とよばれる青灰色を帯びたシルト・粘土の含有が多い土壌が地下深く堆積してい

る。これらの低地は、小輪中的な囲い地（郷地）が分布していた所で圃場整備を中心とした土地改良事業の遅れから、最近まで湿田が残っていた地域である。福島潟周辺の地下構造は複向斜と考えられ、かつては加治川と阿賀野川の間に存在した巨大なラグーンの最も水深の深い所であったと考えられる。ボーリング資料によれば、約31 mまでの砂層は主として加治川・阿賀野川の堆積物によるものであると推定され、表層の泥炭層は福島潟の自然沈積作用によるものとされている。福島潟へ流入する中小河川は、例えば南部の折居川のように、デルタを発達させることにより湖岸線を後退させ、潟の面積を縮小させた。潟の北部では、加治川水系の河川が比較的緩やかに流れ込んでいるが、南部では湖岸から3～4 kmしか離れていない洪積世の丘陵地である陣ヶ峯丘陵、あるいは菱ヶ岳山地から比較的急勾配の斜面を、本田川をはじめとする諸河川が一気に流入している。福島潟東岸は湖岸集落の発達が著しく、新川・天王・中ノ通などの集落が列状に連続してみられる。これらの集落は湖岸砂丘上にあるが、砂丘の形成原因は本田川などの運搬する土砂と、冬季間の北西季節風により生じた波浪によるものと考えられる。

以上のように、豊栄市には砂丘・砂堆、自然堤防とその後背湿地、最も低湿な盆状低地といったおよそ三つの地形上の特色がみられる。

では豊栄の集落の立地とその微地形はどうであったのか。居住地の選定は、その時代の生産様式や手段に大きく左右される。縄文時代は、狩猟・漁撈生活が中心で一般に河岸段丘・山麓と沖積平野の遷移点が、弥生時代から現代にかけては、農耕の発達と水防の関係から、自然堤防・砂丘・砂堆・人工堤防といった微高地が選択された。縄文中期の土器は新砂丘Ⅰ—3・4にそれぞれ位置する松影と鳥屋遺跡から出土した。前者は砂丘上、後者は砂丘と古川（旧新井郷川）と呼ばれる旧河道の後背湿地の中間点にあり、それぞれ砂層中に発見されたものである。豊栄市以外では、加治川村の新砂丘Ⅰ—1上に立地する山草荷遺跡から、縄文前期の土器が出土している。このように、最も古い内陸側の新砂丘Ⅰには縄文土器が点在している。また、弥生土器は出土が非常に少なく、豊栄市では松影や新砂丘Ⅱ—3の引越・たやしき・尾山にみられるのみである。新砂丘Ⅱは、新砂丘Ⅰに比べ連続的に分布している。古代にみられる土師器・須恵器は、新砂丘Ⅰ～Ⅲのすべてと内陸の自然堤防からも発見されている。旧加治川以北の新砂丘Ⅲからは縄文と弥生土器の出土がなく、土師器・須恵器のみ出土する。その他、砂丘・砂堆には石鏃・石斧が数多く発見されている。このように市北部を占める木崎地区を中心とした砂丘・砂堆の南斜面は、先史から古代にかけて重要な居住地であったと考察されている〔島1988〕。

豊栄市内で本格的に沖積平野の開拓が始まるのは第1章に述べたように近世である。ここで宝暦5（1755）年絵図、「慶長十年給地方村々高目録」、「元禄検地帳」（1705年）に基づいて集落の成立を地形と関連づけて考えてみたい。慶長以前の集落は、長戸呂・山飯野など海拔2～3メートルで阿賀野川の自然堤防上にみられる。また里飯野も駒林川の自然堤防に立地する集落である。砂丘・砂堆上の集落の成立は相当古いと考察される。次に元禄検地帳に記載されている各集落も阿賀野川・駒林川の自然堤防、砂丘・砂堆上にみられる。長浦、葛塚地区の低湿地に集落が登場するのは宝暦図からである。駒林川下流、新井郷川とその旧河道の自然堤防・氾濫原には多くの集落がみられる。高森新田・大瀬柳のように高森・長戸呂の新田として、それぞれ本村からある程度離れた自然堤防上に成立した集落もある。また、下興野新田（後の葛塚）・太田興野もこの時期に成立している。下興野新田のうち現在の樋ノ内と白新町は、新井郷川の自然堤防と氾濫原の関係にあり、本町通りから大口通りは、黒山方面から続く新砂丘Ⅰの微高地上に位置していると考えられる。大口には、砂堆の一部と考えられる孤立丘陵状の丘に石動神社が建立され、砂堆に居住した農家の鎮守として信仰を集めた。伝承では、この丘は周辺の水路を航行する船の目印になっていて、葛

のつるがからまる木々が生い茂っていたため葛塚という呼び名が生まれたという〔五百川 1995〕。昭和 41 (1966) 年の七・一七水害（羽越水害）で、とくに中大口・上大口・本町通りの微高地は、冠水をまぬがれたり、比較的浅い冠水であったことから、生活する上での家屋の建立には自然堤防及び微高地を選んでいたといえよう。

江戸時代後期の開発は、福島潟周辺に集中した。前新田・新鼻は、潟湖面を干拓した囲い地や、用排水路筋に形成された。明治期に入ると囲い地の造成がより活発になり、内沼沖・新鼻沖・前新田沖といった村々が、潟の人工堤防や囲い地の土手に形成された。これらの集落は堤防に沿って直線状に形成され、新しい干拓地を背後に、潟を前面にして立地した。これらの村々は漁業を副業とした半農半漁の村であった。以上のように豊栄市における集落の成立と発達、先史・古代では砂丘・砂堆、緩いて自然堤防に移り、近世に入ってから氾濫原・三角州へと展開し、最終的には福島潟干拓地とその堤防へ移動した。これを海拔高度からみると、10 m 前後の砂丘・砂堆の南斜面、3～5 m の比較的高い自然堤防とその氾濫原、さらに 0～1 m の三角州および湿地へと移り変わっていったのである。

（B） 正尺 A 遺跡発掘調査から

平成 12 年 4 月・5 月に 2 回に渡って（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団が行った発掘調査から得られた資料を基に見ていきたい。この遺跡は豊栄市葛塚字正尺 3, 080 番地近辺にあり、旧島見前潟の東縁の微高地上に位置し、旧大口川・旧新井郷川の川端でもあり、現在は宅地・水田化されている。この微高地は河川堆積による自然堤防と考えられる。さて、この発掘調査は、調査対象地の任意の位置に試掘トレンチを設定し、重機（バックホー）を使用して徐々に掘り下げる方法を採用している。遺物包含層については、一部人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認し、記録した。

平成 12 年 4 月の調査 土層の層序は、次の通りである。

I A 層	褐・暗褐・暗灰色粘質土	盛土
I B 層	黄灰色粘質土	盛土
II 層	茶灰・暗褐・暗灰色土	旧表土。部分的に焼土、炭化物、褐鉄鉱を含む。
III A 層	茶灰・灰・茶褐色粘質土	概ね褐鉄鉱、部分的に焼土を含む。
III B 層	茶灰・黄灰色粘質土	III A と同質だが酸化が少ない。
IV A 層	青灰・灰・黄灰色粘質土	粘性が強い。若干シルト質。
IV B 層	青灰・暗青灰色粘質土	粘性が強い。若干シルト質。IV A と同質だが、酸化が少なく、しまりが若干弱い。炭化物を多く含む。水分が多い。古墳時代の遺物包含層。
V A 層	青灰・淡灰褐色粘質土	シルト質が強い。若干炭化物を含む。水分が多い。
V B 層	暗緑灰・暗青灰色シルト	植物の腐食物を含む。
V C 層	青灰・淡灰褐色シルト	炭化物を微量に含む。
V D 層	暗青灰・淡暗緑灰色シルト	砂質分が強い。

遺構・遺物については、平安時代と古墳時代の遺物が出土したが、平安時代は土師器の長甕が出土したのみで、この地に遺跡の本体が存在した可能性は低い。古墳時代は前期の土器が多数を占め、微高地のほぼ中央北側で出土している。遺物包含層が良好な状態で存在しており、遺物集中地点では遺構の存在する可能性がある。今回調査地点の自然堤防に沿って南側に周知の正尺 A 遺跡・正尺 B 遺跡、西側に正尺 D 遺

跡が存在するため〔阿部 1988・新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カード〕、正尺C遺跡〔鈴木 1999〕を含めたこれらの遺跡は、同一河川による自然堤防上に存在した古墳時代前期の一連の遺跡と考えられる。

平成12年5月の調査 4月の調査では、古墳時代の良好な包含層が確認され、遺跡が西側に拡大すると考えられたため、西側を調査することになった。土層の層序は、次の通りである。

- I層 褐・暗褐・暗灰色粘質土 盛土。
- II層 茶灰・茶褐・黒褐色土 旧表土。
- III層 茶灰・灰・茶褐色粘質土 概ね褐鉄鉱。
- IV A層 青灰・灰・黄灰色粘質土 粘性、しまりが強い。若干シルト質。
- IV B層 青灰・暗青灰色粘質土 粘性、しまりが強い。若干シルト質。IV A層と同質だが、酸化が少ない。炭化物が多い。水分を微量に含む。
- V A層 青灰・淡灰褐粘質土 シルト質が強い。炭化物を若干含む。水分が多い。
- V B層 暗緑灰・暗青灰色シルト 砂質分を微量に含む。

遺物については、古墳時代前期の土器が出土した。微高地の西縁近辺に良好な状態で包含層が存在し、一箇体の土師器を検出した。遺構の存在する可能性がある。また、微高地南西側縁試掘の結果から旧表土は南側にわずかに落ちこんでおり、遺物も出土しなくなることがわかった。戦後米軍によって撮影された航空写真によって、自然堤防に乗る形で古墳時代前期の遺跡が存在することがわかった。橋状に延びる自然堤防上に正尺A遺跡が広がると予想される。

以上が正尺A遺跡の発掘報告の抜粋である。平成12年11月段階で、正尺A遺跡（註1）・正尺C遺跡（註2）とも発掘調査は終了している。より最新の情報、詳細で精緻な結果が出るであろうから、それを参照すべきである。

末文

以上のように正尺の立地について触れてきたが、第1章から紫雲寺潟・福島潟の形成が恐らく9世紀頃であろうとすることから、正尺遺跡との関連は殆ど無いことが判明した。しかし、潟が形成される以前から大小河川が存在していたことは想定される。菅谷川や加治川・佐々木川、さらに福島潟が形成される前に流れていたであろう豊栄近郊の中小河川が豊栄・北蒲原南部を蹂躪していたことは確かである。旧河川の調査が行われれば、ある程度までの水路復元がなされると思われる。そういった意味では第1章は蛇足であり近世正尺の考察のためものの感は拭えない。どちらにしても、豊栄・北蒲原地区は先史から現代に至るまで水との戦いの歴史であったことは確かである。これらの中で、第3章（A）で触れたように、集落の成立と発達、先史・古代では砂丘・砂堆、緩いて自然堤防に移り、近世に入ってから氾濫原・三角州へと展開し、最終的には福島潟干拓地とその堤防へ移動した。これを海拔高度からみると、10 m前後の砂丘・砂堆の南斜面、3～5 mの比較的高い自然堤防とその氾濫原、さらに0～1 mの三角州および湿地へと移り変わっていったのである。つまり、水と戦い利用し克服することによって生活範囲を沖積地まで拡大した。正尺遺跡はその人間と水との歴史の中の一時期存在したのである。正尺遺跡の人々の足取りはそこで途絶え、再び人が生活するようになるには約1,400年の開きが存在するのである。しかしそれだけの年代差があるにも関わらず、第2章（A）で触れたように人々は同じ場所に住まいしたのである。ではそこはどのような場所であったのか。第2章（B）・第3章（B）から、自然堤防であり、それを上手く活用し安全に暮らすための水防の場であったのであり、生活の場でもあったことが読みとれるのである。

註

1) 本文中の発掘調査のほか、平成11年6月、平成12年6月から10月に(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団が調査を行っている。

2) 平成9年12月、平成11年7月、同年9月から12月、平成12年4月から12月に(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団が調査を行っている。

引用・参考文献

- 阿部朝衛 1988 『正尺遺跡』『豊栄市史』資料編1 考古編 豊栄市
五百川 清 1995 『にいがた歴史紀行四 豊栄・北蒲原郡②』新潟日報事業社出版部
石川 亨ほか 2000 『新潟県地質図』新潟県
磯部利貞・林 正巳・山崎久雄監修 金子 智ほか 1981 『新潟県の地理散歩一下越編一』野島出版
伊藤 充ほか 1990 『豊栄市史』資料編2 近世編 豊栄市
井上鋭夫 1979 『新潟県の歴史』山川出版社
大木金平 1921 『郷土史概論』
大熊 孝 1979 『信濃川 治水と歴史』アーバンクボタNO.17 久保田鉄工株式会社
太平覚太郎 1977 越後地誌風俗全書 『温古の栞』歴史図書社
小熊博史 1996 「越後平野における旧石器・縄文時代の遺跡の立地とその変遷」『第四紀研究』第35巻第3号
小野弥造ほか 1985 「紫雲寺湯新田発起覚書」『中条町史』資料編第三巻 近世下 中条町史編さん委員会
榎根 勇 1985 『越後平野の一〇〇〇年』新潟日報事業社
菊池利夫 1966 『新田開発』至文堂
木村 礎 1980 『近世の村』教育社
古田島貞一ほか 1984 『図説にいがた歴史散歩 豊栄・北蒲原1』新潟日報事業社
小林巖雄ほか 2000 『新潟県地質図説明書』新潟県地質図改訂委員会
小林 式 1979 『わが町の歴史 新潟』文一総合出版
小林 式ほか 1980 『新潟県史』資料編8 近世三 新潟県
小林 式ほか 1989 『角川日本地名辞典』一五 新潟県 角川書店
斎藤晃吉 1969 『湖沼の干拓』古今書院
坂井秀弥ほか 1989 新新バイパス関係発掘調査報告書『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
坂井陽一ほか 1991 『新潟市史』資料編12 自然 新潟市
阪口 豊 1954 「越後平野の古地理の問題によせて」『第四紀研究』第3巻5号
島 吾郎 1988 「豊栄市の自然環境」『豊栄市史』資料編1 考古編 豊栄市
鈴木栄太郎 1968 『日本農村社会学原理』未来社
鈴木 勉 1999 「正尺C遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成11年度
関 雅之ほか 1980 『鳥屋遺跡Ⅰ』新潟県豊栄市・縄文晩期土坑群の発掘調査報告 豊栄市教育委員会
関 雅之ほか 1986 『新潟県の地名』日本歴史地名大系15 平凡社
関 雅之ほか 1989 『新五兵衛山遺跡Ⅰ』新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡第一次発掘調査報告 豊栄市教育委員会
関 雅之ほか 1996 『新五兵衛山遺跡Ⅱ』新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡第二次発掘調査報告 豊栄市教育委員会
関 雅之ほか 1999 『葛塚遺跡』新潟県豊栄市葛塚遺跡発掘調査報告 豊栄市教育委員会
武田広昭ほか 1970 『福島潟』新潟県干拓地民俗緊急調査報告書 新潟県教育委員会
竹内利美 1976 『信州の村落生活』名著出版
田中圭一・桑原正史・阿部洋輔・金子 達・中村義隆・本間恂一 1998 『新潟県の歴史』県史15 山川出版社
田中久夫ほか 1978 『亀田郷』新潟県文化財調査年報第17 新潟県教育委員会
田辺健一 1941 「日本海岸砂丘の形態的分類並に土地利用」『地理学評論』第17巻
丹呉善衛ほか 1980 『新潟県のあゆみ』新潟県
茅原一也ほか 1977 『新潟県地質図説明書』新潟県
鳥谷部 仁 1966 『亀田郷治水史』亀田郷水害予防組合
豊栄市博物館 1979 『低湿地とよさか』
永田 聡ほか 1973 『新潟県土地分類基本調査 新潟』新潟県農地部農地計画課
新潟古砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡—新潟砂丘形成史Ⅰ—」『第四紀研究』第13巻第2号
新潟古砂丘グループ 1975 「新潟砂丘」『第四紀研究』第14巻第4号
新潟古砂丘グループ 1978 「新潟砂丘砂—新潟砂丘の形成史Ⅱ—」『第四紀研究』第17巻第1号
新潟古砂丘グループ 1996 「新潟砂丘の形成史」『第四紀研究』第35巻第3号
福田アジオ・宮田 登 1983 『日本民俗学概論』吉川弘文館
福田アジオ 1982 『日本村落の民俗的構造』弘文堂

- 松島静雄・中野 卓 1958 『日本社会要論』 東京大学出版会
- 町田 貞・荒巻 孚 1965 「阿賀野川右岸地域の海岸砂丘・砂堆について」『東京大学地理学報告』九
- 宮崎芳春・関 雅之ほか 1992 『上土地亀遺跡』新潟県豊栄市上土地亀遺跡発掘調査報告 豊栄市教育委員会
- 宮本常一 1964 『ふるさとの生活』『日本の村』 未来社
- 水戸部 正ほか 1978 『聖籠町誌（増補版）』 聖籠町誌編さん委員会
- 村川三男 1968 「阿賀野川右岸地域における微地形と水田分布の地域的变化—沖積平野の地理的研究—」『新潟県
高等学校教育研究会社会科部会研究論集』第13集
- 山川菊栄 1983 『わが住む村』 岩波書店
- 山本文右衛門 「干拓経過上申書」 豊栄市役所蔵
- 山本 肇 1996 「越後平野における弥生時代～中世の遺跡の立地とその変遷」『第四紀研究』第35巻第3号
- 柳田国男 1962 『日本農民史』 筑摩書房
- 柳田国男 1964 『郷土誌論』 筑摩書房